

2023年度

愛知の音楽教育

(第58集)

もくじ

I はじめに	2
II 教育課程編成にあたっての基本的な考え	3
III 授業実践	4
音楽の諸要素の働きを根拠に作曲者の意図に迫り、音楽鑑賞の楽しさを体感する子の育成 — 1年『曲想から役柄を探る—魔王—』の実践を通して— 西尾市立西尾中学校での実践 西尾市立一色中学校 花井 朋美	
1 主題設定の理由	
2 研究の方法	
3 研究の実際	
4 研究の考察	
5 今後の課題	
IV 第73次教育研究愛知県集会のまとめ	11

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会 音楽部会

2023年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	分会	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
◎田中 省吾	名古屋	鎌倉台中	粥川 宏輝	尾北	城東小	梶野 琴絵	刈谷	平成小
○難波 友理子	名古屋	ほのか小	寺澤 真智子	知教連	阿久比中	近藤 章博	蒲郡	塩津中

第69次～72次教育研究全国集会リポート提出者

69次			71次			72次		
氏名	単組	分会	氏名	単組	分会	氏名	単組	分会
○中島 明子	豊田	逢妻中	澤下 了輔	愛知	栄小	花井 朋美	西尾	一色中

第73次教育研究全国集会リポート提出者

相坂 晴美 (名古屋・南陽小)

I はじめに

コロナ禍による影響が徐々になくなり、コロナ禍以前と同様に教育活動を行うことができるようになってきた。学校現場でも ICT 機器の活用がすすみ、子どもたちの学び方の自由度が増し、学び方の選択肢が増えた。そして、ICT 機器は授業だけでなく教員の働き方の改革にも活用されている。それに伴い、子どもや保護者だけではなく教員の考え方も大きく変わりつつあると感じる。学校行事も精選されてきており、さまざまな行事を取りやめたり、縮小したりする動きも加速している。また、部活動も地域移行が進んでいる。今後、学校現場では、子ども達が行事や部活動を通してじっくりと音楽と向き合う機会や場が縮小していく流れにあると感じる。

音楽は人の心を震わせる力をもっている。美しい音楽を聴いて感動する豊かな心を育み、音楽表現を通して仲間とかかわり合う喜びを味わわせることができる音楽教育。ICT 機器の活用によって学校での学び方だけでなく、学びの機会や場が変わっていても、音楽の本質は変わらない。さまざまな背景をもつ子どもたちが一緒に学ぶ義務教育の現場において、言葉を用いずに、子どもたちの心を豊かに育むことができる音楽には、多くの可能性があるといっても過言ではないだろう。今一度、音楽教育の重要性と可能性を再認識し、目の前の子どもたちに向き合っていくことが大切だと考える。

愛知の教育は、これまで「人づくりと音楽」を柱にして実践を積み重ねてきた。これは、表現は一人ひとりの心の現れであり、よりよい表現を求めることは、感性を育み、豊かな情操を養うことにつながるという考えが基となっている。第73次教育研究愛知県集会で集められたレポートは15本。これらは、第72次までに積み上げられた課題に基づいて、本年度も続くコロナ禍の中で、試行錯誤しながら実践がすすめられたものである。音楽の授業を通してどんな子どもを育てるのか、めざす子どもを育てるために身に付けさせるべき力とは何か、めざす子どもを育てるための基礎・基本の指導方法や教材選択のあり方に、また、ICT 機器を活用し、効率的な授業展開や音楽表現を高める工夫が多数報告され、活発な議論が行われた。

今回の授業実践として示すものは、昨年度、全国大会にて報告されたレポートであり、実践者が目の前の子どもたちに真摯に向き合った成果である。これらが、愛知の子どもたちの豊かな学びにつながる、愛知の音楽教育の一助となれば幸いである。

II 教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

音楽科では、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養うことがねらいである。

そこで、以下の点について重点的に指導したい。

① 歌唱・器楽の活動

- ・ 音楽を聴いたり楽譜を見たりして演奏することや、歌詞の内容や曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。
- ・ 呼吸及び発声の仕方を工夫して自然で無理のない響きのある歌い方で歌ったり、楽器の特徴を生かして楽器演奏をしたりすること。
- ・ 各声部の役割や全体の響きを感じ取り、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。

② 音楽づくり・創作の活動

- ・ 構成する過程を大切にしながら、音楽のしくみを生かし、さまざまな発想をもって即興的に表現したり、見通しをもって音楽を作ったりすること。
- ・ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復・変化・対照などの構成を工夫しながら、簡単な旋律や音楽をつくること。

③ 鑑賞の活動

- ・ 曲想やその変化などの特徴を感じ取って聴くこと。音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造を理解して聴くこと。
- ・ 楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏の良さを理解すること。

④ 共通事項について

- ・ 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。
- ・ 音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。

○「生きてはたらく力」

世の中にある膨大な情報量の中から、自分の気に入った音楽を選んで、存分にかかわる力は、人生をより豊かにしていくためにも必要である。その中でも、合唱・合奏は他者の頑張りを尊重したり、足りない部分は補いあったりしながら、自分ひとりでは決して成し得ない音楽をつくりあげることで、社会での多様性や生き方を学ぶことができる。

また、社会の急速な変化により、人間関係が希薄になりつつある社会の中で、子どもたちが音楽を通じたコミュニケーションを通じ、例えば音楽づくりの過程でどんなことを学び、経験し、時には試行錯誤しながらもその中で何かを発見し、音楽を作り上げながら逞しく成長していくことは、生きてはたらく力を身につけるために有効だと考える。

III 授業実践

音楽の諸要素の働きを根拠に作曲者の意図に迫り、音楽鑑賞の楽しさを体感する子の育成

— 1年『曲想から役柄を探る—魔王—』の実践を通して—

西尾市立西尾中学校での実践

西尾市立西尾中学校 花井 朋美

1 はじめに

本学級の子どもは、音楽を聴くことに対して意欲的である。ヴィヴァルディ作曲「春・第1楽章」を鑑賞した際には、「お城で踊っている曲みたい」「明るい街を散歩しているみたいで、わくわくする感じ」など、曲を聴いて思い浮かべた情景を素直に書く子どもが多かった。しかし、強弱の変化や音色の特徴などの音楽の諸要素に着目して鑑賞することができる子どもは少数であった。そこで、曲を聴いて描かれている物語や情景を自由にイメージすることのできる子どもが、音楽の諸要素に着目し、作曲者が何を表現しようとしてその作品を作ったのかという意図にまで迫ることができるようになれば、これまでよりもさらに音楽を聴くことの楽しさを実感することができると考えた。

このような実態から、本実践では、音色や強弱、速度などの諸要素がどのような働きをもっているのか、作曲者はそれらの働きを用いてどのような雰囲気を生み出そうとしたのかを追究していく。そうすることで、主題に迫っていくことができると考えた。そこで、上記のような研究主題を設定した。

2 研究の構想

(1) めざす子ども像

研究主題に迫るため、本研究でめざす子ども像を次のように設定した。

- ①音楽の諸要素に着目し、それらの要素の働きと曲想を結びつけて聴くことができる子
- ②諸要素の働きがもたらす効果に気づき、作曲者はそれらの働きを用いてどのような雰囲気を生み出そうとしたのかという意図に迫りながら、楽しんで聴くことができる子
- ③今後の音楽活動において、鑑賞して学んだことを表現活動に生かすことができる子

(2) 研究の仮説と手だて

めざす子ども像に迫るため、研究の仮説と手だてを次のように設定した。

仮説Ⅰ：鑑賞する曲に出会う場面において、作曲者が表現しようとした感情や情景、世界観についてのイメージを膨らませる活動を取り入れることで、その後の鑑賞を通して作曲者の意図に迫ろうという気持ちを高めることができるだろう。

手だて① 『魔王』の原語で書かれた楽譜を見ながら、それぞれの旋律が具体的にどの役柄を表しているものであるのかを追究し、ICTを活用して学級全体で話し合う。

仮説Ⅱ：歌曲を繰り返し鑑賞する場面において、音楽の諸要素の働きを手がかりにしながら登場する役柄の特徴や心情を探ることで、それぞれの諸要素と曲想とを結びつけて聴くことができるようになり、作曲者の意図に迫りながら楽しんで聴くことができるようになるだろう。

手だて② 『魔王』の原語で書かれた楽譜を見ながら、それぞれの旋律が具体的にどの役柄を表しているものであるのかを追究し、ICTを活用して学級全体で話し合う。

手だて③ 諸要素の特徴に着目しながら役柄ごとの気持ちの変化に伴って音楽がどのように変化しているかを追究する。

仮説Ⅲ：既存の歌曲を歌う場面において、その曲に合った音楽の諸要素を自分自身で考えてみるという経験をすることで、諸要素の働きがもたらす効果をより実感し、表現活動にも学んだことを生かすことができるようになるだろう。

手だて④ 日本歌曲『赤とんぼ』の強弱記号が書かれていない楽譜を配付し、歌詞や旋律の特徴に合った強弱を自分自身で考える活動を行う。

(3) 本研究における抽出児Aについて

Aは音楽の授業に意欲的に取り組むことができる。1学期にヴィヴァルディ「春」を鑑賞した際には、真剣な表情で耳を傾け、「お城で踊っているみたい」など、感じたことをたくさんワークシートに書いた。しかし、音楽の諸要素に目をむけて鑑賞する力はまだ不足していると感じた。Aには、本単元での学習を通して、音楽の諸要素を根拠に鑑賞することで音楽の奥深さや面白さに気づき、これまでよりも一層音楽の楽しさを実感してほしい。

3 研究の実践

(1) 楽曲へのイメージを膨らませ、作曲者の意図に迫ろうという気持ちを高める子

ア、『魔王』ってどんな曲だろうードイツリート『魔王』との出会いー(手だて①)

単元の導入として、まずは、『魔王』の詩の内容を描いた絵を見て、気づいたことを話し合う活動を行った。『魔王』はドイツの有名な文学者であるゲーテが作詞をし、シューベルトが作曲をしたドイツリートである。『魔王』には、語り手、父、子、魔王の4人の人物が登場する。父は子をしっかりと抱き、森の中で馬を走らせる。魔王は子を連れ去るために甘い言葉で誘惑するが、父には魔王が見えない。子は恐怖に怯え、必死になって父に助けを求める。子どもたちには、まず『魔王』の世界観についてのイメージを自由に膨らませてほしいと考えた。また、その後の鑑賞に生かせるようにするために、詩の内容や登場人物どうしの関係をしっかりと理解できるようにすることを本時のねらいとした。



まずは、曲名をあえて伝えずに絵を提示した。(資料1) 子どもたちは黒板に貼りだされた絵を見ると、「怖い」「何か白い幽霊みたいなのがいる」「子どもがすごい顔してる」などと、第一印象を口々につぶやいた。そこで、「これから、『春』のときのように、『魔王』という曲の鑑賞の授業をしていくよ。ドイツ語の曲だけれど、音楽を聴いて『魔王』の物語の内容や役柄について探っていくよ」と話し、単元名「役柄から魔王を探るー魔王ー」を板書した。

音楽の特徴を手がかりにして『魔王』について探っていくという課題をもった子どもたちに、ワークシートを配付し、絵から想像したことを自由に書かせた。その際、できるだけ具体的にイメージすることができるように、①登場人物、②場所、③場面、④登場人物の様子、⑤絵から感じる雰囲気の5つの項目に分けて書けるようにした。(資料2)

資料2: Aの鑑賞のワークシート(絵から想像)

絵から想像した「魔王」の世界

登場人物	場所	どんな場面?	登場人物の様子	絵から感じる雰囲気
白馬、子、 お父さん、 お母さん、 お友達	森、夜、 お城、 道、 山	馬に乗っている、 お城に行く、 お城で	①お城で待っている、 ②お城で待っている、 ③お城で待っている、	怖い、 不思議、 怖い、 怖い(魔王)

子どもたちは、ワークシートにも記載された絵をじっくりと見ながら、想像したことをもくもくと書いていた。Aは登場人物の様子について、「(父は)必死に逃げているような感じ、(子は)怯えている、苦しい」と書いた。このことから、絵を見て『魔王』の世界観について自由にイメージを膨らませることができたことがわかる。

絵から想像したことについて学級全体で話し合うと、「白い人(魔王)から逃げている」「焦っている感じがする、緊迫感がある」「不気味、恐ろしい」などの意見が多数出てきた。

絵から『魔王』の世界観を自由に想像した子どもたちに、「次は音楽から想像し

資料3: Aの鑑賞のワークシート(原曲から想像)

原曲(ドイツ語)から想像した「魔王」の世界

怖い、怖い(怖い)

・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、
・お城で待っている、

てみよう」と声をかけ、原曲（ドイツ語）の音源を再生した。すると、曲が始まってすぐに何人かの子どもが「怖い」と呟いた。資料3は、Aが原曲を聴いて感じたことをメモしたワークシートである。「最初のころの馬が走っているようなリズム」「主人公が何か必死にやっているような感じ」「焦っている、逃げている」と書かれていた。

これらのことから、Aは絵を見たり原曲を聴いたりしながら、『魔王』の世界観を自由に想像し、楽曲に興味をもつことができたといえる。

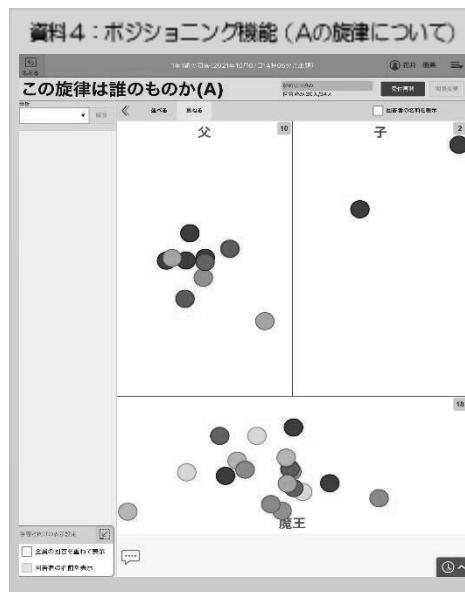
(2) 音楽の諸要素の働きをヒントにしながら、諸要素と曲想とを結びつけて聴く子

ア. この旋律はどの役柄を表しているものだろうかーICTを活用した学び合いー（手だて②）

『魔王』は、4人の役柄の旋律をバリトン歌手が一人で歌いわけている。本時では、語り手の旋律以外の11種類の旋律をA～Kに分類し、それぞれの旋律がどの役柄を表しているのかを考えていくことで、音楽の諸要素を根拠に鑑賞できるようにすることをねらいとした。

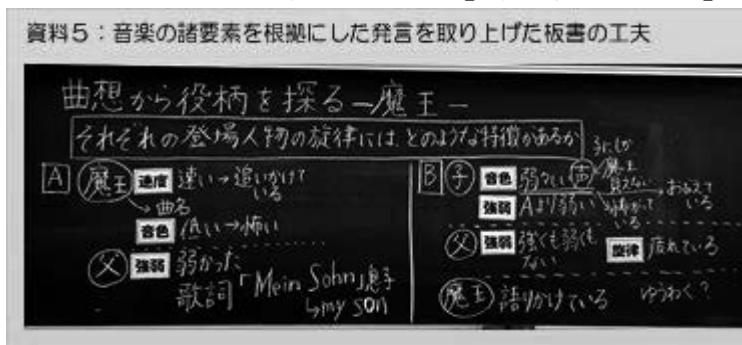
楽曲のイメージを膨らませ、役柄どうしの関係をしっかりと理解した子どもたちに、「この曲、何人で歌っていると思う」と問いかけた。そして、原曲（ドイツ語）の前半部分を再生した。すると、子どもたちからは「一人だ」「え、四人じゃないの」「三人気がする」とさまざまな予想が出てきた。

そこで、『魔王』は4つの役柄を一人の歌手が歌っていることを伝え、「今から流す旋律は、父か子か魔王のうち、誰だと思う」と問いかけた上でAの旋律を流した。冒頭のAとBの旋律については、子どもたちが諸要素の働きと関連づけて分析できるように、SkymenuCloudのポジショニング機能を用いて学級全体で考えを共有した。（資料4）

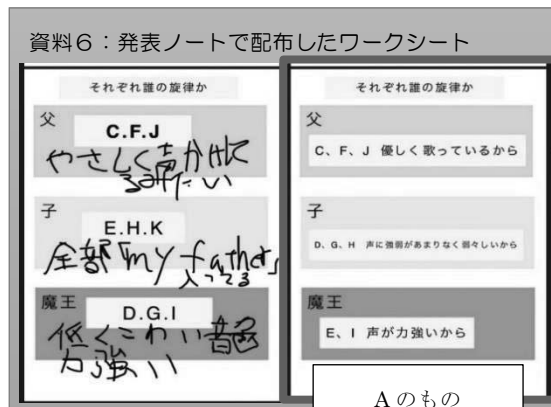


ミラーリングして示したため、子どもは学級の仲間がどのように聴き取ったのかをすぐに確認することができた。資料4から、多くの子どもが「父」または「魔王」ではないかと考えていることがわかる。なぜそう考えたのかを問うと、「速くて、追いかけている感じがしたから、魔王だと思った」「声が低かったから」

「ちょっと弱いから、優しい感じがした。だから、お父さんだと思います」などと、「速度」や「音色」、「強弱」などの音楽の諸要素の働きを根拠にした意見が出てきた。このような要素の働きを根拠にした発言を工夫して板書することで、分析をする際の着眼点を明確にするようにした。（資料5）



導入場面で二つの旋律の分析を全員で行った後、発表ノートで教員が作成したワークシートを配付し、すべての旋律についてどう判断するか、個人でまとめる学習活動を行った。子どもたちには、あらかじめ配布してあった楽譜を見ながら、ワークシートに示された「父」「子」「魔王」の枠に、それぞれの旋律のアルファベットを入力するように指示した。さらに「なぜそのように分析したのか、理由も書き加える」という指示を出した。子どもたちは、ペン機能や文字機能を用いて、自分のワークシートに分析の根拠を入力した（資料6）。ワークシートを見ると、「やさしく声かけてるみた



J)については自分自身で考え、ワークシートに書くように伝えた。資料9は、Aのワークシートである。子や魔王の旋律について、強弱に着目して鑑賞し、子の焦りや恐怖が増していること、魔王ははじめ優しく誘惑しているが、最後には本気で捕まえようとしていることなどを聴き取ることができたことがわかる。

その後の学級全体の話し合いでは、強弱や速度、旋律、音色を根拠に、さまざまな意見が活発に出てきた。(資料8) 諸要素の働きを手がかりにしながら、それぞれの役柄の心情の変化を探ることができたことがわかる。

子どもたちの振り返りを見ると、「歌い方を少し変えるだけでこんなにも曲想が変わって、聴いていて楽しかったです」「曲の中にいろいろな工夫があったり、役によって音程、音色や気持ちが考えられていたり、興味が引かれるいい曲だなと思います」「他の人もみんな登場人物の気持ちが伝わってくると言っていて、こんなにたくさんの人に音楽で登場人物の気持ちやその場の空気を伝えられるのはすごいと思いました」「ドイツ語の歌詞で言葉の意味はわからなかったのに、音楽だけで場面が想像できたので、作曲したシェーベルトさんはすごいと思いました」などと書かれていた。資料10は、Aの振り返りである。「最初は魔王は強くうたってこわがらせていると思っていたけど、日本語訳を見て、魔王はやさしく、ゆうわくするようにうたっていてびっくりしました」と書かれている。

これらのことから、Aは歌詞の内容を理解し、前時よりもさらに諸要素と曲想とを結びつけて聴くことができるようになったといえる。

(3) 鑑賞して学んだことを表現活動に生かす子

ア. 作曲家の弟子になろうー日本歌曲『赤とんぼ』での実践ー(手だて④)

「先生、もう『魔王』は聴かないんですか」音楽室に入ってきた子どもが声をかけてきた。本単元で何度も鑑賞するうちに、『魔王』を好きになった子どもがとて多くなったようだ。「Mein Vater! Mein Vater!」と、子の旋律を歌う子どももみられるようになった。鑑賞の授業を通して、作曲者が意図して音楽の諸要素の働きを生かして音楽をつくっていることを知った子どもたちには、諸要素の働きがもたらす効果をより実感し、表現活動にも学んだことを生かすことができるようになってほしいと考えた。そこで、日本歌曲『赤とんぼ』の強弱記号が書かれていない楽譜を配付し、歌詞や旋律の特徴に合った強弱を自分自身で考え、実際に歌ってみるという活動を行った。

資料9：Aのワークシート

父の旋律の変化
Aはとんとん強くなっている
FよりIの方が強い

父の気持ちの変化
おすこが、助けてを、たねてくるから、父もこわくなっている

子の旋律の変化
Aはゆるゆる
強弱いかんじEは少し強くなっている
HよりKの方が強い

子の気持ちの変化
初めは父に賛同しているけど、たねてんおすこが強くなっている。

魔王の旋律の変化
Dからすこ強
Jで本気でつかまそうとしているから少し強くなっている

魔王の気持ちの変化
やさしく、ゆうわくしているけど、子がいやがるから、本気でつかまそうとしている。

資料10：Aのワークシート

自分の強弱が、あって迫力があるというのに共感しました。私は最初は魔王は強くうたってこわがらせていると思っていたけど、日本語訳を見て、魔王はやさしく、ゆうわくするようにうたっていてびっくりしました。

資料11：Aが考えた「赤とんぼ」の強弱と、工夫したところ

【自分だったら、この旋律にどんな強弱をつける?】

mp mf mp

f mf mp

★自分の考えた「赤とんぼ」の、こだわりポイント★(工夫したところ)
最後の「ぼやめ」は切ないかんじがしたので、やや弱くしぼめ。
最初も切ないかんじがしたので、たねてん音が上がって元気になった感じだったので、たねてん強くしました。

まず、教員が『赤とんぼ』を範唱し、歌詞の内容を確認した。次に、ワークシートを配付し、個人で強弱記号を考える活動を行った。(資料1 1) Aは「切ない感じがしたので、やや弱く」「音が上がって元気になった感じがしたので、だんだん強く」と書いており、自分なりの意図をもって曲想を表現しようとしていることが伝わってきた。

授業の後半には、近くの席の友だちとワークシートを見せ合って考えを共有したり、実際に友だちが考えた強弱で歌ってみたりした。資料1 2は、Aの振り返りである。「私と同じで切ない感じがしたから弱くする人もいて、逆に違う人もいたので、おもしろかった」と書いていた。さらに、「曲に山があって」と書かれており、旋律の音の上がり下がりの特徴に気付くこともできたこともわかる。その他の子どものワークシートには、『赤とんぼ』はとてもゆっくりで里ののどかな感じと寂しい感じを表していると思った。情景を想像できる曲を作った山田耕作さんはすごいと思う」「自分で強弱をつけてみて、ふだん何気なく聴いている音楽にもそれぞれ作曲している人が考えて強弱をつけていることに気付きました。これからはそこを気にしながら聴いてみるのも面白いかなと思いました」などと書かれていた。

資料1 2：Aの振り返り

今日の振り返り(学んだこと・気づいたこと)
 私と同じで、最後は切ない感じがしたから、弱くする人もいて、逆に違う人もいたので、おもしろかったです。気づいたことは、最初は弱くしている人がいて、全体的に、強いのかなと思っただけで、曲に山があって、意味を考えたりおもしろかったです。

これらのことから、作曲者が何を表現しようとしてその作品を作ったのかという意図に迫ることができるようになり、これまでよりもさらに音楽を聴くことの楽しさを実感することができるようになったといえる。

イ、クラスでの合唱に、学んだことをいかしたいー単元を終えた子どもたちの変容ー

鑑賞の単元を終えた11月、市内の新型コロナウイルスの感染者も連日0人となり、安心して合唱練習することができるようになった。合唱コンクールは中止となってしまったが、合唱することの喜びを体感してほしいと考え、クラス曲を決めて三部合唱を行うことにした。授業の振り返りを呼んでいると、「この曲は勇気づけてくれるような曲なので、優しいけれど強く歌いたい」「強く歌ったほうが歌詞のように一歩踏み出す感じがいいかなと思う」「音が高くなっているところの強弱記号に気をつけて歌った」など、歌詞の内容や楽譜に書かれた強弱記号に目をむけて、それを表現しようとしていることが伝わってきた。資料1 3を見ると、「フォルテがあるところは強く歌うことを意識しました」などと書いており、Aも諸要素の働きを生かして表現しようとしていることがわかる。多くの子どもが本実践で学んだことをこれからの音楽表現に生かそうとしていることがわかり、嬉しくなった。

資料1 3：Aのワークシート

月日	今日の振り返り
11/21	今日は1番から2番まで音の練習をして、拍をのばすところや、fがあるところは強くうたうことを意識しました。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 手だてと仮説の有効性

<手だて1>

『魔王』の詩の内容を描いた絵を活用したことで、曲についての自由にイメージを膨らませることができた。その結果、子どもたちが『魔王』に興味をもち、その後の鑑賞の授業に子どもの意欲を繋げることができた。

→授業実践3 (1) ア

<手だて2>

『魔王』の原語で書かれた楽譜やICT (SkymenuCloud) を活用したことで、それぞれの旋律が誰のものかを追究することができた。その結果、音色や強弱といった音楽の諸要素を手掛かりにして鑑賞することができた。

→授業実践3 (2) ア

<手だて3>

音楽の諸要素の動きを手がかりにしながら、それぞれの役柄の心情の変化を探る活動を行った。その結果、前時よりもさらに諸要素と曲想とを結びつけて聴くことができるようになった。

→授業実践3 (2) イ

<手だて4>

日本歌曲『赤とんぼ』の強弱を自分自身で考える活動を行った。その結果、諸要素の動きがもたらす効果をより実感したり、作曲者の意図に迫ったりすることができるようになった。

→授業実践3 (3) ア

(2) 今後の課題

本実践を通して、曲を聴いて自由にイメージするのみであった子どもたちが、音楽の諸要素に着目して鑑賞できるようになり、作曲者の意図に迫ることができた。その結果、音楽の奥深さに気付き、これまでよりもさらに音楽を聴くことの楽しさを実感することができたのではないかと手ごたえを感じている。

しかし、音楽の諸要素に着目すること(知覚)を大切にするあまり、音楽そのものの美しさやよさを素直に感じ、伝え合うこと(感受)を置き去りにしてしまったという反省がある。これについては、今後も検討していく必要がある。

IV 第73次教育研究愛知県集会のまとめ

一 全体を通して

音楽教育分科会では学習活動における子どもたちの変容をわかりやすくとらえるために動画を取り入れた発表形式ですすめられた。歌唱・器楽・鑑賞・創作のすべての分野において、子どもたちどうしの対話や交流活動を取り入れ、主体的・対話的に音楽表現を追求することができるような手だてを講じた実践が多く報告された。工夫を凝らした手だてによって、子どもたちどうしがかかわり合い、変容していく様子がよくわかるものであった。実際に音楽表現をする場面におけるいきいきとした表情や楽しそうに活動している様子が印象的であった。子どもたちの実態をふまえ、めざす子ども像を明確にし、わかる楽しさ、できる喜びなどの経験を積み重ねていけるよう、さまざまな工夫をしていくことが大切であることが確認された。また、各実践において、ICT機器の活用が随所にみられ、学校教育の中でICT機器が自然に取り入れられるようになってきたことが確認された。討論の中ではデジタルの手軽さとは別に、実際に楽器に触れる場面や大人数で音楽づくりをする感動を味わう活動を大切にしたいということが話し合われた。

二 討論の内容

(1) 子どもたちの主体的な音楽表現につながる効果的なICT機器の活用

各自治体で採用されている学習アプリに違いはあるものの、小・中学校ともに積極的な活用実践が報告された。ノート機能を使って表現を可視化したり、リコーダーや鍵盤ハーモニカの演奏動画を配信したりすることで、安心して授業に参加でき、その後の主体的な学びにつながれるという効果が報告された。また、ICT機器を録音・録画に使用し、子どもが客観的に振り返るためのツールとして利用したり、リコーダー演奏や歌唱の様子を録画し、教員が評価のために記録を残したりする手段として利用することも報告された。

創作の分野では、アプリを使用して地域の紹介動画のBGMづくりを音声や効果音を取り入れて制作したという実践も報告された。

ICT機器を使った学びは個別の学習には最適だが、協働的な学びにつなげる活用方法が今後の課題であると話し合われた。さらに、ICT機器はツールであり、目的ではないこと、教員の工夫があるからこそツールが生きてくるということを忘れてはいけないという助言を得た。

(2) 音楽教育と地域とのかかわり

地域に住む演奏家や伝統芸能を行っている団体を紹介した特別授業などを通して、地域の音楽・生の音楽に触れる体験活動や、中学校の合唱コンクールに地域の小学校六年生招待することで、小中の連携をはかったという実践が報告された。しかし、コロナ禍で地域とのつながりが切れてしまったこともあり、人材確保が難しいことや、音楽科の授業の中だけで行うには時間的な確保が難しく、他教科と関連付けるなどの工夫が必要だということも話し合われた。

三 来年度の課題

- (1) 子どもたちが協働的に音楽表現を追求できる効果的な手だて
- (2) 主体的な学習活動の中での教員の指導・支援のあり方